



岩登りの危険

石岡繁雄

・極高ジャンダルムにて(熊 革命)・

本稿の第一回は昨年八月號岩登り特集(二八二號)に掲載され、その後スキー號等のため休載、今號より岩登り講座として連載されます。

四、個々の技術についての説明を行うまえに、これまで述べてきたところをもう少し論じたいと思う。

登山によつて生計を立てているという場合には別の要素が入ってくるが、そうでない場合には、究極において登山が楽しみのために行われるというよりは言をまたない。たとえ、その時には楽しくないという場合があつても、後でふりかえ

であり、本来の意味のレクリエーションである。後者は、登つているときは非常に苦しい時もあるが、後をかえりみて楽しい登山であり、これが既に述べたスポーツ登山ということになると思う。

登つているときに苦しくなるといふ原因は他のスポーツ同様、運動が過激のために肉體的苦痛が伴うからであり、又體力の限界に近づいて疲労、空腹、寒冷による苦痛が生ずるからである。

併し、登山が他のスポーツと全く趣を異にするのは、この原因の他に、もう一つあることである。それは人間のもつ本能に反する苦痛即ち、恐怖の苦しみがあることである。

つてみた時には楽しい筈であり、それだからこそ又山へ登ろうとするのである。

従来、よく行われているように、登山を靜的登山と動的登山とに分けてこの點を考へてみると、前者は、體力からも危険からも餘裕のある登山で、登つてい

(他のスポーツでも試合に負けられないという精神的な苦痛はあるが、登山のそれとは本質的に異なる)即ち、動的登山は、スポーツとして青少年が全力を打ちこむのに相應しいものであるが、全力を傾けることによつて、レクリエーションが變じて苦しみとなつてゆくがその原因に肉體的なものと、精神的なものがある。そのうち、精神的なものは登山に特有なものであるから、登山を一般スポーツ並みに考へることには、問題があると思う。

前に述べた極地法登山、スキー登山等の苦しみは肉體的なものが主であり、岩登り(氷雪を含む)、危険を伴う冬季登山は、究極に於いて精神的な苦痛と對決せざるを得ない。肉體的な苦しみは、それが進行しても大したことではないが、後者は、もはや楽しみなどというものから遙かに離れて、しばしば人間性そのものをも喪失せしめることになる。これは人間最大の本能にさからつていゝるため當然のことといえる。

このよい例に、ウインバーのエクラン初登攀の記録がある。ウインバー等は生命にかかわる恐怖のため、初登頂しても楽しみは全くなく、もし助かるのなら、山登りは一切やめてもよいと神に祈つたと記してある。又お互に聞くに耐えぬ罵詈をあびせあつたとしてある。誰しもあることを(口に出さなくて

岩登り講座

も) ウインバーが率直に記していることには心から敬服するが、併し果してそんなものが明らかなスポーツといえるだろうかという氣がする。もしそうなればスポーツの手段として岩登りを選ぶ者は、次の心構えが必要だということになつてゐる。

即ち、上記の觀點からすれば、いわば危険への接近は既定ともいえるのであるから、ウインバーのような状態におちいることはありうるとせねばならない。即ち、死の場合を想定しておかねばならない。その時に仲間喧嘩などしないように立派に死ぬ覺悟が必要だということになる。

このよい例は、南極のスコットであり北鎌でなくなつた松濤、有元(登歩溪流會員) 兩氏であろう。こうなると岩登りは、禪宗や軍人のような精神修養が必要だということになる。こういう精神修養は、ないよりはあつた方が良くにきまつているが、問題はスポーツにそういう事態を豫想し、肯定せねばならぬかどうかということである。これは樂しみを求める筈で出發したスポーツ登山としては(スポーツでないというのなら別であるが—スコットの如く) 誠におかしなこ

とであるといわねばならない。

又この精神が前述の教養に缺けた人達にはヤクザ精神につらなる可能性を充分に内蔵していることを思うとき、このことは一層よく論議される必要があると考える。もし岩登りがどうしてもそういうものを要求するものであつたとすれば、スポーツとしてそのようなものを選ぶのは(何も知らない場合はともかく) 馬鹿か、狂人ではなからうかということになる。少くとも、兩親も社會も絶對に許しはしないと思う。

一方、危険そのものについても、更によく考えてみなければならぬ。今、危険を偶発的な危険と、豫知出来る危険とに分類してみると、前者は日常生活にもあてはまる危険である。即ち、誰しもある危険の確率の上に行動していることになるが、この危険は全く偶発的であるので豫め恐怖を感じないのである。これに反し、後者は本能にさからうことによる恐怖をもたらす危険であつて、例えば岩登りの場合には、山が持つもとの危険と、それを克服する人間の技術とが、次第に接近することから生ずる豫知出来る危険である。(人智には限度があるので又不運としか思われぬような場合もあつて、この危険の意識が困難な場合もあるが) 今まで述べた岩登りの危険は、勿論後者をいうのである。

即ち、岩登りに全力を打ちこむということは、必然的にこの距離をちぢめることを意味すると思うから、全力を打ちこんでいるスポーツ的な楽しみみの状態は、必然的に最大の恐怖に一轉することがありうるのである。即ち岩登りに傾倒していればいるほど、恐怖に變化した場合に收拾つかなくなるが多いのである。いいかえれば岩登りはここにスポーツとしての矛盾をもつわけである。

要するに、私の念願することは全力をあげて戦う岩登りを、死の覚悟までしてやる必要がないようにしたい、少くともそういう意味の岩登り技術大系を形成したいということである。純真なスポーツマンに、死の恐怖を味あわせたくないということである。それにはどうすれば良いか。全力を傾むける対象を、岩登りの外観的な目標の遂行におくことをせず、安全確保、自己の力と岩場との正確な判断に、即ち、岩場の複雑な個々の場合に對處し、それを科學的に分析して外見危険な場所におりながらも、技術と合理性によつて客觀的にも自己を安全におくということに全力を傾注したいと思う。勿論、従来ともそうであつた。この點は既に述べた。而してある岩場の完登という

ことは、その副産物としたいのである。従つてそのために岩登りスポーツの精神から離れることがあつてもやむをえないことと思ふ。而してこの基礎の上に立つ以外に明朗な岩登りの發展はないと信ずる。

五、岩登りが純粹に、科學的基盤に立つて考慮されねばならないことは既に述べたとおりである。この觀點から岩登りの技術を考察してみる。

(1) 登攀者が、あやまれる闘志などによつて麻痺されることのない状態のもとで、恐ろしいという感情がおこることは、山の危険とそれを克服する技術との差が、少いことを表示するものと考えてよい。即ち恐怖の感情の發生というものは、安全な登攀、科學的岩登りの限界にきたことを示す唯一のシグナルと考へてよい。故に、その恐怖の實態が何であるかを分析し、もし合理的な解決の方法がみつからなかつたならば、登攀を中止せねばならない。

しかし、なんとなく恐ろしいという理由で引返すのは、科學的な態度とはいえない。例えば、もし天候が悪くなるかもしれないという種類のものではあつたとしても、はっきりとその見通しのつくまでは、登攀を中止することは適當でない。天候の悪化の速度と下降の時間とをみきわめ、兩者をにらみ合せ

つつ登攀をつづけねばならない。そして危険區域に入る直前に、退却を始めるというのが科學的な登攀である。ただ、何となく恐ろしいからという理由で引返すのならば、汽車に乗るとき今回の山行はなんとなく恐ろしいからといつて、引返した方が汽車賃だけでも得になるのでなからうか。この恐ろしいと思ふことの分析（従つて恐ろしいという氣持の發生が手遅れにならないようにすること）が、科學的岩登りの核心である。今恐怖のおきる種類を次のように分類してみる。

(イ) はつきりとこの場所が危険だという場合：この場合はたとえそこで失敗してもすり傷位ですむという百％確かな確保手段を考へねばならぬ。(最近問題になり初め自動確保の實験の考察は) 施面が研究されねばならない。この點で述べる そうすれば恐怖の感情はなくなり登攀は再び安全圏内に入る。勿論そうでなかつたら登攀は中止せねばならない。

(ロ) 何となく恐ろしいとか、不安だという場合：これにはいろいろの場合がある。隊員が疲勞により、行爲と思考に正確さが失なわれてくるとか、前途に對する不安、即ち、ルート、天候、チームワーク等に對する不安がそれである。要するに、無意識ながら、あらゆる場合には完全であるという計算が出来なくなつてくるときにおきる不安である。特に、この不安は、困難な岩場を越す回数が多

岩登り講座

くなつて、何となく退却が不可能ではないかという心配に基因する悲愴感が、漠然と全體を支配しはじめる場合に多い。この種の恐怖が岩登りを最も不明朗化している原因であると考えるので、科學的な岩登りの確立のため、この恐怖を一掃せねばならぬと思う。今後主として述べるところである。

(ハ) 偽りの恐怖……言葉が適當でないがこういう恐怖があると思う。例えば、平素街を歩いていても今にも自動車にぶつかるとはならないかという氣持に急に襲われることがある。岩登りに於いても、自己の平素の技術から考へて、恐怖を感じる必要のない場所で、突如として恐怖にかられることがある、(こういう氣持にしばらくは岩登りの素質にかける人であるかもしれない)

私自身、こういう經驗がある。それは大東亞戦争中の四月、池の平から劔の三窓に直接登るため、正面にみえる二つの大きな瀧を登つたことがあるが、七十度の傾斜の瀧の中程の小さなテラスでやつと腰を下ろして、春の雪解水が、物凄く飛沫となつてとんでゆくのをみているうちふと今登つてきた場所に目を移したが、その瞬間いいいようのない恐怖に襲われてしまった。どういふものか全く別の

世界につれられてきたような氣持になり、絶對絶命という感情が全身を支配し、手も足も硬直したようになつて、汗だけ出てくるのである。別にむずかしい場所でもなく、何とも思わないで登つてきた場所をながめてどうしてそんな氣持になるのかどうしてもわからない、或は偶發的危險に屬するのかもしれないが、その時はどうなることかと思つたのである。結局今までの練習を思ひうかべ、足場の傾斜、アイゼンの齒の方向等を考へ、岩にかじりついてはおしまひと思つて、故意に岩から身體をはなし、ガク／＼しながらも懸命に岩登りの理論そのままに手足を動かしたが、そのうちにすっかり平常にもどつたのである。

私は心理學がわからないので何ともいえないが、偽りの恐怖に屬するものであらうと思つている。こういうものを克服するには、完全に身についた基礎技術というものが必要ではなからうかと考へるのである。

平素、ゲレンデで練習するのに、岩の傾斜ナーゲルと岩との摩擦に關する感覺、足がガタついてくる時のバランス等、上すべりで通つてきたような人は、きつとこういう時に困るのではないかと思う。併し偽りの恐怖とはいつても、例えば仲間が遭難死したような時には簡単な場所ですくんでしまうものであ

る。併し又平素の訓練の心がまえが、大きな力になることも確かである。即ち、岩登り技術は、他のスポーツの技術にも増して、感による技術でなくして、少々ざこちなくとも、理詰の技術でなければ、いざという時の役に立たないと考える。又科学的基盤に立つた技術であれば、偽りの恐怖か、眞の恐怖かを區別することが容易となる、もっとも眞の恐怖が突如としておこつてくるといふことは、科學的岩登りではあつてはならない筈である。

これについて思い起すことは、私の恩師(今は故人と)は非常に慎重な人であつたので、奥さんは常に「もし主人に事故があつたとしても、それは眞に不運なやむをえないことでありませうから、いつでもあきらめることが出来ます」といつておられたが、岩登りの態度はこうありたいものと思う。又そうすることに眞の楽しみを見出いだすことが大切ではないかと思ふ。

(2) 先人の業績を理解することによつて、自己の力を高めることが大切である。即ち、先人のふみ跡の中に岩登りの正しいあり方が含まれているものである。

例えばルートにしてもそうである。三ツ峠六甲山、御在所岳といった岩場でのルートと一ノ倉、劔岳、穂高岳のルートとは自から異なる。ましてや欧州アルプス、ヒマラヤとなると、全く異つてくる。三ツ峠では高さ五米の一枚岩は興味を中心であるかもしれないが、穂高では見向きもされない。又穂高では屏風岩が問題になつても、アルプスやヒマラヤでは慮外である。初心のうちには、それが分らないから、穂高へいつても、三ツ峠のつもりで小さな岩に死物狂いの闘争を演じている。いかえれば岩のスケールを正しく把握する技術が必要となつてくるのである。

次に、例えば瀧谷のルート圖が先人によつて畫かれていた。併し勿論登れる場所は他にもあるだろうが、そのルートがルート圖に畫かれるにはそのルートが、正しい岩登りに必要な優れた条件を持つてゐるからである。故にまづそのルートに忠實に従つて、登ることが大切なのである。それを登つてゐるうちに地形をみる目が出来るのであり、先人が困難だといつた場所が、自分の技術ではどの位であるかがわかり、別のルートへも安全にとりつける資格をもつのである。

こうした一步一步の段階を踏まずして、自己の正しい評價も出来ていないのに、未知のバリエーションをねらうなどは論外といふこ

とになる。よくルート圖から離れた場所で、物凄い落石をさせながらハーケンをむやみにたたいて登つてゐるのを見る。

こういうパーティーは山小屋で我々こそ困難なバリエーションを開拓してきたのだといつた顔付でゐる。こういう點は歴史のある山岳グループとか大學山岳部とかとなるとまるで趣が異なる。そのようなグループの一員となつた者が、登山の初心者でも比較的大きな仕事に加わらされるのは、先輩が直ちにその者の肉體的、精神的力量を評價し、又正しい岩登りを順序よく教え、大きな仕事の適所につかせるのである。おそらく岩登りくらしい、獨力で上達することがむづかしいものはないのではないかと思ふ。そしてもし獨力で上達する方法があるとすれば、それは先人の書物をよくよみ、先人の足跡を正しくたどること以外にはないと思ふ。(つづく) (岩棲會代表)

往來人岳

木原 均氏 (京大農學部教授) —— 京大カラコラム・ヒンズークシ探検隊隊長となる。

横 有恒氏 (日本山岳會々長) —— 第三次マナスル登山隊長に決定したが、今春は偵察隊を送る。丈にとどまり、本格的アタックは本年秋のモンストン後か、明年春のモンストン前に決行。

百瀬舜太郎氏 (日本山岳會山梨支部常務委員)

—— 山梨縣商工會議所一號議員に當選。